

経営比較分析表（平成28年度決算）

埼玉県 熊谷市

業務名	業種名	事業名	類似団体区分	管理者の情報
法適用	水道事業	末端給水事業	A2	非設置
資金不足比率(%)	自己資本構成比率(%)	普及率(%)	1か月20m ³ 当たり家庭料金(円)	
-	67.37	97.94	2,538	

人口(人)	面積(km ²)	人口密度(人/km ²)
199,718	159.82	1,249.64
現在給水人口(人)	給水区域面積(km ²)	給水人口密度(人/km ²)
194,555	156.15	1,245.95

グラフ凡例
■ 当該団体値(当該値)
- 類似団体平均値(平均値)
【】 平成28年度全国平均

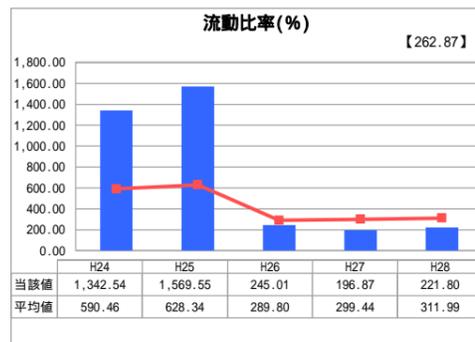
1. 経営の健全性・効率性



「経常損益」



「累積欠損」



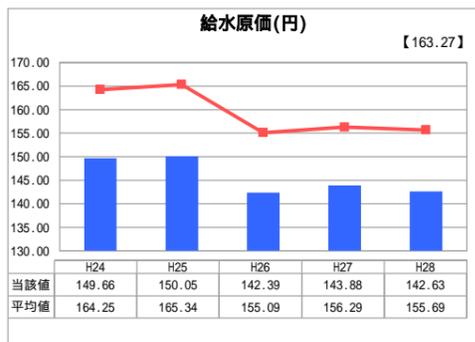
「支払能力」



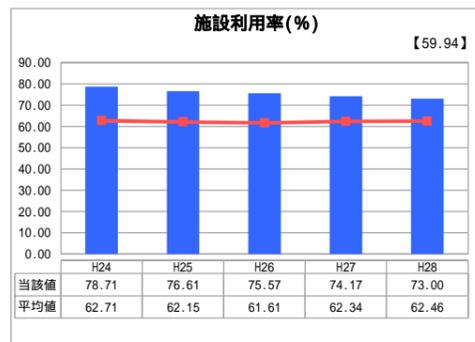
「債務残高」



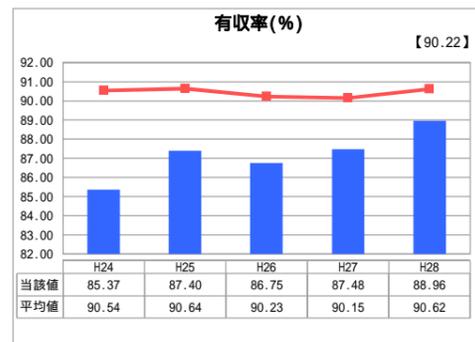
「料金水準の適切性」



「費用の効率性」



「施設の効率性」



「供給した配水量の効率性」

分析欄

1. 経営の健全性・効率性について

経常収支比率は100%を上回っていることから、当該年度において、給水収益や一般会計からの繰入金等の収益で、維持管理費や支払利息等の費用を賄っている状況にある。今後人口減少により給水収益が減少することや施設の老朽化により修繕費等が増加することが想定されるため、経営戦略の策定等により、投資の効率化を図り、費用の削減に努め、健全経営の継続に努めてまいりたい。

累積欠損金比率については、他団体が過年度において欠損金を計上していた時期にも本市においては継続して欠損金を計上していない状況であるものの、給水収益が減少傾向にある中で、今後施設の老朽化等による更新投資が必要となることも想定されることから、継続して費用の削減に努める必要がある。

流動比率については、平成25年度まで平均を大きく上回っていたが、平成26年度に平均程度に低下した。これは制度改正により、企業債のうち、翌年度に支払うものを流動負債として計上することになったことが大きな要因となっている。

また、平成27年度において年度内に工事の支払いが完了せず、流動比率が低下したものの、平成28年度には消費税還付金を計上したこと等により、流動比率が改善した。

なお、継続して100%以上を維持していることから、1年以内に現金化できる資産で、1年以内に支払わなければならない負債をまかなえている状況である。

企業債残高対給水収益比率については減少傾向にある。今後は施設の更新量の増加等により必要となる資金が増大する可能性もあるため、資金需要を見極め、安定的な企業経営が行えるよう尽力したい。

料金回収率について、継続して100%を上回っており、給水費用を給水収益でまかなえている状況にある。

給水原価については、過去5年度間一貫して類似平均団体より低い水準にある。今後も投資の効率化や維持管理費の削減に努め、給水原価の減少に努めてまいりたい。

施設利用率は類似平均団体より高いことから、配水能力を有効に活用して配水を行っていることが読み取れる。今後も必要な配水量の状況を考慮しながら、施設の統廃合も検討し、効率的な経営に努めていく必要がある。

有収率については類似平均団体よりも低い状況である。平成28年度は若干改善したものの、漏水等の対策を継続して実施し、有収率の向上に努めてまいりたい。

2. 老朽化の状況について

有形固定資産減価償却率については、これまで年々増加傾向にあったものが、平成28年度において若干の減少となった。この要因は平成28年度において、市内にある全ての浄配水場の監視・制御を行う設備を導入し、その投資が多額となったためであり、施設の老朽化が改善されたわけではない。

このため、類似平均団体よりも低いものの、今後も人口推移等を勘案しながら、必要な施設を見極め、有効で効率的な投資を行っていく必要がある。

管路経年率については、類似平均団体よりも低い水準にあり、現状では法定耐用年数を経過した管路は少ない状況にあるものの、管路の更新を継続して行い、施設の維持管理に努めていく必要がある。

管路更新率については平成23年度をもって石綿セメント管の改良がほぼ終了し、それ以後は浄配水場の設備更新に投資してきたことから、平均よりも低い水準にある。また、これは管路経年率が類似平均団体よりも低い水準にあることも関係しているが、今後急激に管路経年率が上昇することも考えられることから、管路の経年状況を考慮しながら投資を検討していく必要がある。

全体総括

経営の健全性・効率性については、今後も健全で安定した経営を継続するため、投資の効率化等に努め費用の削減に努めていく必要がある。

老朽化の状況についても、施設の状況をアセットマネジメント等で把握し、基本計画や経営戦略に基づき中長期的な期間での効率的・効果的な投資を行うことで、安全で安心な水の供給の確保に努めていく。

平成24年度から平成25年度における各指標の類似団体平均値は、当時の事業数を基に算出していますが、管路経年率及び管路更新率については、平成26年度の事業数を基に類似団体平均値を算出しています。